

女性技術者が語る土木の世界

寺本和子

TERAMOTO Kazuko
豊橋創造大学短期大学部
教授

中西利美

HAKANISHI Toshimi
中日本建設コンサルタント(株)
環境技術部理事 部長

正木啓子 (進行)

MASARI Keiko
大阪府道路公社常務理事
土木学会理事

□ 2006年7月6日(木) 豊橋市豊橋公園三の丸会館お茶室「千切庵」

■ 土木の役割を知ってほしい

正木——本年5月、土木学会会長提言「良質な社会資本整備と土木技術者に関する提言(中間報告)」が出されました。その「提言の趣旨」に『我が国の経済、社会は、有史以来はじめて経験する長期的な人口の減少傾向や高齢化への対応、さらにグローバル化や近隣諸国の経済発展に対応した国際競争力強化に向けて様々な課題の克服に迫られている』とあるように、人口動向は、わが国の経済・社会を展望するにあたっての基本的要素です。少子高齢化の進展で労働人口が減っていくなか、女性の活用は社会の潮流となっています。また、土木学会では「土木という言葉について」という小冊子を作成しましたが、最近、大学や都道府県の組織名から土木という表現がなくなっており、土木のもつ意味や内容自体が問われる時代になっています。本日お集まりのメンバーは、いわゆる土木の世界に長く在籍され、個人、家庭、職場、社会のさまざまな切り口でご意見を伺えるものと期待しています。



寺本和子

まずそれぞれの個人的な経験や土木とのかかわりからお聞かせください。

寺本——私は主に防災の仕事に携わってきました。災害がない、渇水がなく水がいつでも飲める、道路が崩れない。そういう世界が当たり前にな

っており、一般の人は放っておいても安全であると思っています。人が安心して暮らせる社会に貢献してきたという面では、素晴らしいことだと思っていますが、そこに土木の果たしてきた役割があるということをもっと知ってもらい必要があるのではないかと考えています。防災以外の面でも同じです。たとえば、車で道路を走りながら、橋が架かっているところを見ると、その技術はすごいと思うし、誇らしく感じます。そういうところを皆さんが少しでも知るようになればいいなと思います。

中西——私は上下水道関係に携わってきましたが、昔から土木は憧れでした。人間が安全で安心して豊かに暮らしていくためには、土木は不可欠なものです。「土木人物辞典」で、パナマ運河に携わった青山士^{あき}さんのことを読んだときは、とても感動しました。当時知られていなかった日本の技術者が、異国の地で熱病にうなされながらも現地の人とともに施工をし、その風土に合った土木技術を培ってきたのです。日本は島国で、山や海岸が多く、多様な地形のなか、人口密度が高く、台風、洪水、地震などあらゆる災害に見舞われ、その都度整備をし、復興をしてきました。そういったことを一生懸命、われわれや先人がやってきたわけです。

最近は公共事業＝悪と言われますが、すべてがだめというわけではありません。やはり必要なものは整備していかなければいけないと思います。過去に人間が手をかけてつくったものは、

子どもを産んで育てるように手をかけていかなければいけないと、つくづく思っています。

■ 信念をもって言うことも必要

正木——人びとの安全な暮らしを支える土木の仕事が一般になかなか理解されないことは残念ですが、社会のために誇りと気概をもって働くことができる仕事だと思いますね。

寺本——豊橋には路面電車が走っています。欧米ではよく活用されています。しかし、私が豊橋市役所にいたころには、市役所全体としては理解がありませんでした。しかし、私は路面電車は将来の公共交通として、また、豊橋のまちのシンボルとしても大切だと力説しました。最近では、国土交通省でも力を入れ出し、新しい補助制度も創設されたこともあり、改訂された豊橋市の都市交通計画に路面電車が位置づけられるところまでできました。そのように先を見通して、自分なりに信念をもって主張したことが実現していくのを見るのもやりがいがあるところですよ。

正木——同じような経験が防災公園化への改修がありました。その公園は昭和40年中頃に、みどりの多い居住環境をつくるため樹木を密植したのですが、最近では、樹木が育ち暗がりができるなど防犯上の課題もありました。防災公園への改修にあたり、フェンスを取ったり木を植え替えるなどしました。密集市街地の公園ですから、すぐ隣が住宅、フェンスは洗濯物の物干し用なので取ったら困る(笑)。またフェンスがないと物騒だとお叱りや反対も受けました。でも、実際に見通しのよい延焼遮断帯ができれば、近所の人たちから「明るくよく見えるようになったから、安心して歩けるようになった」と言われました。それを聞いたときはうれしかったですね。こうしたほうが良いということは、信念をもって言ったほうが良いこともありますね。

■ 男性の働き方では子どもも産めない

正木——女性技術者として苦労したことはありますか。

中西——女性の場合は昔だったら必ず23時という“門限”があって、男の人みたいに深夜まで働くわけにはいきませんでした。

ですから、必ずタイムスパンを考えます。会議では、みんな行き当たりばったり、なかなか結論がでない。そこで「申し訳ないのですが、私はここまでしか時間が取れませんので、自分の言うべき意見を述べさせていただきます」と要点だけを先に述べるなど、会議の進行を工夫していただくことにより、いつの間にか会議の時間が徐々に短くなってきて、決まった時間に結論を出すための会議になっていきました。

寺本——男の人は何時に帰ってもいいという頭があるのか、働き方がルーズな人が多いと感じます。夕方になって「ご飯を食べに行くか」と言っていて、その辺に食べに行き、帰ってきて「じゃあ碁でもやるか」と碁を始める。それで19時くらいになっておもむろに「じゃあ、やるか」と、仕事を始めるでしょう。子育て中の私たちには、そんな時間はありません(笑)。だから、必死になって5時まで片付けて帰るんです。

正木——かつて現場事務所の帰宅時間は22時、23時が当たり前でしたけど、私は早く帰りたいというのがあったので、昼休みをあまり取らなかったですね。昼は、パンをかじりながらでもできる仕事をしていました。そのうえ、暑いので手拭いを首や頭に巻いている(笑)。「柄が悪いのでやめてください」と部下に言われた。でも、休憩しているくらいだったら、少しでも早く書類を片付けておこうという感じでした。今はちょっと反省しています。

寺本——時間に関係ない働き方が当たり前みたいに考えられて、それに女性が合わせていくと、子



正木啓子

どもも産めない。女性の働き方のほうに合わせてもらわないと困りますね。

■ 大きな変化が起きている

正木——10年前、広島で「土木技術者女性の会」主催で、労働基準署や企業の方などと土木界の女性技術者活用についてパネルディスカッションをしたのですが、女性の坑内労働の規制緩和が話題になりました。いただいたご意見の中に、山の神が怒るからというのがありましたが、その伝説はヨーロッパの聖バーバラ伝説を土木工事のお雇い外国人がもたらしたとも言われており、そう古い神様ではない。また、昭和初期の丹那トンネル工事でも、亡くなった人の中に女性の名前があるとのこと。今では機械化が進み、職場環境も改善されてきました。当時、坑内労働の規制緩和が話題になった背景には、トンネル工事の現場で仕事をしていたある女性技術者が坑内で作業ができず、その上司とともになんとかできないかと模索したのですが、結局労働基準法で禁止されていたためにだめだったということがありました。やっと、先の国会で労働基準法の改正が決まり、女性が坑内作業をできるようになります。今回の改正のように、男女共同参画社会に向けて、職場や社会で大きな変化が起こっているのではないかと思います。いかがでしょうか。

中西——昔は23時までしか残業できなかったが、今はできる。それが大きな変化ですね。それから、女性に危ないこと、汚いことをさせてはいけないとか、周りが必要以上に気を使いすぎていて、一緒に仕事をする妨げになっていたような気がします。女性にも個人差はありますが、おのれの力を知り仲間と協働する際には何が問題なくできて何ができないのかなど意思表示をして仲間に認識してもらう行動が必要であり、これらが周りの人の意識改革につながってくると思います。

先のトンネルの話では、私は昔の育ちなので、自然の神様が怒って周りの人が迷惑するのだった

ら、私はその先には行きません。その中に入って仕事はできませんが、トンネルの外での資料収集、調査・設計や、周辺住民にその工事のメリット・デメリットを同じ目線でわかりやすく伝えることなどはできます。

寺本——昔は女医さんに診てもらおうと心配だという男の人がいましたが、今はどこへ行っても当たり前のように女医さんがいます。土木の世界でも女の人が増えてくれば、女の人だけトンネルに入らないのはおかしいと思う人も増えてくるかもしれません。

ただ、トンネルの話では、確かに危険なところがあることも確かです。いつ崩れるかわからないようなところで、水がすごい勢いで漏っている。そういうところを見ると、厳しい現場だから、ある意味優しさでもって女性を入れないということがあるかもしれません。だからといって、危険でないところも全部入れないというのはやりすぎです。

正木——女性を安全なところだけにというと、またそれもおかしい話になってしまう。今回、土木学会技術賞を受賞した箕面トンネルでは、大きな破碎帯があり軟弱地盤のなか困難な工事でしたが、切削のところでは、目の前で上のほうから岩がぐしゃぐしゃと崩れ落ちてくる。水も音もすごくこれは確かに危険で注意がいるということはありませんでしたけどね。

■ 社会資本には心に伝わる美しさがある

正木——ものをつくること、つくったものが人の役に立ち残っていくことは楽しいですよ。最近では、財政縮減などのため新しくものをつくるというより、すでにあるストックをいかに有効活用し大事に使っていくかという考え方にシフトしています。施設を維持管理し守る技術もたいへん重要ですけど、現状をただ守るということだけでは、技術者が夢をもてなくなってしまうような気がするのですが。

寺本——時代が昔の価値観と違うものを求めてき

ているということでしょう。私たちはつくること自体に喜びを味わってきたし、技術の素晴らしさを礼賛してきましたが、これからは、自然といかにかに調和していくかとか、いかに文化的な要素を盛り込んでいくかということに喜びを見出すべき時代です。つくれなくても、いかに管理して長持ちさせるかとか、いかに再生させるかという環境技術みたいな方向もあるのではないのでしょうか。

正木——今、土木学会では土木遺産を残そうという取り組みを行っています。人びとの生活を支える社会資本には、使う人の心に伝わる美しさがあります。つくるときは施設機能、景観調和、地域文化などを配慮しますが、維持管理をするときにもそういうところがきちんと伝わっていくように大切にしていかなければと思いますね。

中西——私は日本土木工業協会から出している『CE 建設業界』という雑誌が好きなんです。先人がつくった土木構造物と風景にマッチした写真がいろいろ掲載されています。愛されている構造物というのは、いつまで経ってもきれいなんですよ。ただ単純にそこにあるもので、なんの親しみもないものというのは、時間とともに廃れて、みずぼらしくなっていくんです。でも、さりげないデザインでも本当は苦心をされていて、そこにマッチしているというものは、時間とともに風合いが出てくる。そうすると、たとえば撤去計画が浮上した場合、住民の後押しで、なんとか保存できないものかという意見が浮上する。そういう構造物は、われわれ土木に携わる者の冥利につきますよね。

それから、市民の意見を聞いて、お互いに話し合っ、暮らしの安全を守るものをつくっていく参加型の土木を大切にしていきたいと思います。われわれは技術者であり、女性であり、母親でもあり、子どももいます。たとえば「これはこういう技術を使ってやったのよ。この間の洪水でも大丈夫だったでしょう。皆逃げなくて済んだよね」と、子どもとの会話のなかで子どもが「そういう仕事をしたい」と言ってくれたならばうれしいですね。

■ 土木に新しい風を 吹き込んで

正木——「土木技術者女性の会」では、『土木技術者を目指すあなたに贈るメッセージ Civil Engineer への扉』という就職支援パンフレットを作成



中西利美

しています。これから土木技術者を目指す女性たちに、土木業界で働いている人たちが、その楽しさや魅力を紹介しています。最後に、これからの女性土木技術者へのメッセージをお願いします。

中西——自分たちだけで安全を守ってやろうとやってきた男社会に対して、われわれとしては、いや女房も頑張る、家族として頑張ろうよということで、土木の世界に新しい風を吹き込んでいきたいと思っています。そして、そういうものづくりに携わりたいという思いを子どもたちに、自分の口から伝えていく義務があるし、ぜひ伝えていきたいと思っています。

正木——土木の世界というのが今日のテーマでしたが、この世界で女性が本格的に働き始めて35年くらいです。したがって、女性土木技術者をどのように育てていくのか、キャリアアップしていくのかという事例がまだあまりありません。今までは少数の特定個人だけに対応していればよかったわけですが、これからは人数も増え、マスとしての対応を必要としています。少子高齢化で労働人口が少なくなり、女性が働くのが当たり前という時代に、女性たちのキャリアアップをどうするかということは、社会的にも重要な問題になっていますし、今までになかった新しい課題です。しかし、それは決して解けない課題ではありません。私たちのこれまでの若干の経験も参考にさせていただき、若い方々が育っていくことを期待しています。土木の世界に対する誤解、偏見を変え、魅力や環境文化を永く伝えていってほしいと思います。本日はありがとうございました。